

十字架のことば (4)  
—第3のことば：愛のことば—  
ヨハ 19 : 25~27

1. はじめに

(1) 「十字架のことば」には7つある。

①前半：午前9時から正午までの間の3時間

\*3つのことば

\*他人に関するものである。

②後半：正午から午後3時までの間の3時間

\*4つのことば

\*自分に関するものである。

(2) 第1のことばは、赦しの祈りである。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」

(ルカ 23 : 34)

(3) 第2のことばは、救いを約束することばである。

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」(ルカ 23 : 43)

(4) 第3のことばは、愛のことばである。

「女の方。そこに、あなたの息子がいます」(ヨハ 19 : 26)

「そこに、あなたの母がいます」(ヨハ 19 : 27)

2. アウトライン

(1) 愛の力

(2) 愛の飛躍

3. 結論：このことばの現代的意味

このメッセージは、第3のことばの意味について考えるものである。

I. 愛の力

1. 憎しみの中で輝く愛

「兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた」 (25 節)

(1) 兵士たちは、4人いた。

- ①彼らは、マニュアル通りに、イエスを十字架につけた。
- ②彼らは、慣例通りに、イエスの着物を4分した。
- ③ここには、無関心、残酷さ、利己心、貪欲が渦巻いている。

(2) 十字架のそばには、婦人たちが4人いた。

- ①イエスの母（マリア）、母の姉妹（恐らくサロメであろう）、クロパの妻のマリヤ、マグダラのマリヤ
- ②弟子たちは逃げていたが、彼女たちは、十字架のイエスに寄り添っていた。
- ③受刑者の親族、友人は、立ち会うことを許されたか？
- ④愛は、危険を冒し、犠牲を払う。

## 2. 痛みの中で輝く愛

(1) 子を失くす母の痛み

- ①人間が感じる最大の痛みであろう。
- ②幼子の死、友人に囲まれての死には、痛みを和らげる要因がある。
- ③しかし、人生の最盛期の死には、それがない。
- ④しかもイエスは、敵に囲まれて死に臨もうとしている。
- ⑤シメオンがマリアに語った預言が成就した。

「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです」 (ルカ 2 : 34~35)

(2) ラケルの嘆き

- ①ラケルは、ユダヤ人の母親の象徴である。
- ②ベツレヘムで2歳以下の男の子が殺された時、ラケルは嘆き悲しんだ。  
「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ」 (マタ 2 : 18)
- ③これは、エレ 31 : 15 からの引用である。  
\*バビロン捕囚に引かれていく我が子を見て、母親が嘆いている。
- ④マリアの嘆きは、イスラエルの母たちの嘆きの集大成である。

(3) 母の痛みを見る息子の痛み

- ①イエスの肉体的苦しみは、筆舌に尽くし難い。
- ②しかし、イエスにとっては、母の痛みを見ることの方がより苦しい。
- ③精神的痛みのゆえに、肉体的痛みを忘れるほどであった。

3. 使命の中で輝く愛

(1) この時、宇宙の歴史の中で、最大の出来事が起こっていた。

- ①アダムによって墮落した人類の罪の贖いがなされようとしていた。
- ②アダムの墮落によって呪われた宇宙が、再創造に向かおうとしていた。
- ③イエスは、宇宙大の使命を実行しておられた。

(2) しかしイエスは、自分に最も身近な人のことを忘れてはいなかった。

- ①この時マリアは、40代半ばから後半であろう。
- ②この年代の婦人は、子どもの世話になるしかない。
- ③しかし、イエスの弟たちはガリラヤにおり、まだ信者ではない。
- ④そこでイエスは、母と弟子を結びつける。

(3) 第3のことば

「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に『女の方。そこに、あなたの息子がいます』と言われた。それからその弟子に『そこに、あなたの母がいます』と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った」 (26～27節)

- ①「愛する弟子」とは、ヨハネのことである。
- ②12弟子の中では、ヨハネだけが十字架のそばにいた。
- ③イエスは、母マリアを弟子ヨハネに委ねた。
  - \*これは証人たちの前で語られた遺言であり、法的効力がある。
  - \*母マリアと弟子ヨハネの間に親子関係が成立した。
- ④ヨハネにとっては、大変な特権である。
  - \*ユダヤ的文脈では、弟子たちは師を「父」と呼ぶことがあった。
  - \*師の母を自分の母とすることは、師から榮譽を受けたことになる。
- ⑤「この弟子は彼女を自分の家に引き取った」
  - \*ヨハネはエルサレムに住まいを持っていたのであろう。
  - \*マリアが死ぬまで、エルサレムに留まった。

## II. 愛の飛躍

### 1. マリアとイエスの関係の進展

#### (1) イエスが公生涯に入る前

- ①ルカ 1 : 35 受胎告知
- ②ルカ 2 : 19 羊飼いたちの言葉を心に納めて、思いを巡らしていた。
- ③ルカ 2 : 34~35 剣が心を刺し貫くと言われた。
- ④ルカ 2 : 48~51 イエスが 12 歳の時、エルサレムに上った。

#### (2) イエスが公生涯に入ってから以降

##### ①ヨハ 2 : 4

「すると、イエスは母に言われた。『あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません』」

- \* 「女の方」とは、敬意を込めた言葉である。
- \* イエスとマリアの親子関係に制限が加わった。

##### ②ルカ 8 : 19~21

「イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためにそばへ近寄れなかった。それでイエスに、『あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに会おうとして、外に立っています』という知らせがあった。ところが、イエスは人々にこう答えられた。『わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行かう人たちです』」

##### ③ヨハ 19 : 25~27

- \* 再び、「女の方」という呼びかけが使われた。
- \* イエスの遺言は、マリアとの親子関係の断ち切りであった。

### 2. 血によるつながりから、愛によるつながりへ

#### (1) イエスが復活して以降

##### ①使 1 : 14

「この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた」

- \* マリアは信者の群れの中の一員となっている。
- \* これ以降、マリアが聖書に登場することはない。
- \* 彼女は、その信仰のゆえに称賛されるべきであるが、崇拝されるべきではない。

#### (2) 血によるつながりから、信仰によるつながりへ

①マリアはイエスを、自分の息子ではなく、主（救い主）と認識した。

結論：このことばの現代的意味

1. 私たちへの教訓

(1) 責務 vs 家族への愛

2. 新しい関係の認識

(1) 血によるつながりではない関係

(2) 愛によるつながりという関係

(3) 神を父とする新しい生き方

(4) ヨハ1:12

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」

(5) すべては変わっても、この親子関係は変わらない。